



新任の先生方からのメッセージ

＜教育実践コース＞

高橋 茉由（たかはしまゆ）講師



今年の3月から学校教育課程、教育実践講座に着任しました高橋茉由と申します。担当している授業は、「初等国語科教育学」や「国語科教育学演習」などです。国語教育について研究をしています。そんな私のことを、少しばかり紹介させていただきます。

私は小さい頃から、自己というものや人間関係に強い関心がありました。時間があれば、自己とはいったいどのようなものなのか、他者はどんなことを考えて過ごしているのかについて考えていました。それらの興味関心が、今の研究の土台にあると思っています。

現在でも暇さえあれば、ドラマや映画を観たり物語や漫画を読んだりしながら、〈ある人〉の生きている姿をリアルに想像することが好きです。なぜ好きなのかは、私にもわかりませんが…、「生きること」について考えるのがとにかく好きなのだと思います。

北海道の札幌で生まれ育ち、大学からは京都府で過ごしました。これまで、京都府、広島県で小学校教員を経験してきました。秋田県に来たのは初めてです。3月に秋田の地に訪れてから、様々な方に出会いそれぞれの生きる姿に出会ってきました。出会いの一瞬一瞬が、私にとって大切な時間であり、多くのことを学ばせていただいています。今後も出会いを大切に、日々学び成長し続けていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

＜教育実践コース＞

川辺 茜（かわべあかね）助教



みなさま、はじめまして。野山が美しく色づく10月に着任いたしました、川辺茜です。

出身は横浜市です。大自然と温泉と祭りと、郷土の音楽、日本酒など、魅力あふれる秋田、そして歴史ある秋田大学教育文化学部に迎え入れていただき、とても嬉しく思っています。大学教員を務めるのは今回が初めてですので、不慣れなこともあるかと思いますが、学生の皆さんと一緒に学びながら、エネルギーに活動してまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

これまで国立音楽大学大学院、ウィーン留学を経て、学位取得後は大学の研究機関でPDとして勤めました。その後は、公立の中学校と高校で音楽を担当しました。コロナ禍で歌唱や演奏といった音楽の実技の活動が制限されるなか、音楽の授業の大切さ、意義と在り方についてとても考えさせられました。

私の研究領域は、声楽の中でもドイツ歌曲（リート）の演奏と解釈です。特に近代以降の、調性的な和声から一線を隔し、無調や12音技法を模索した新ウィーン楽派の音楽を中心に扱ってきました。音楽学的な知見と、演奏実践の知見を横断するような研究を心がけています。現在は、こういった無調や12音による声楽作品に加え、実験的な声楽作品や現代の声楽作品の演奏法・教授法にも関心を持っています。演奏や研究を通して、演奏される機会が少ないながらも、美しい、面白い作品を紹介していきたいです。また、そういった活動を通じて、日本で演奏される声楽作品がより多様になっていくことに貢献していきたいと考えています。

す。（学内で耳慣れない旋律や奇声交じりの歌声が聴こえたら、私かもしれません。不審に思わないでください…）

学生の皆さんとは、主に音楽の実技科目でお会いすると思います。また来年度からは音楽に関する教養科目でお目にかかれるかもしれません。これから、秋田大学の学生の皆さんと、音楽のすばらしさを分かち合えることを楽しみにしています。

＜こども発達コース＞

山口香苗（やまぐちかなえ）講師



はじめまして。今年10月に着任した山口香苗と申します。私の専門は、社会教育学・生涯学習論です。社会教育・生涯学習は、人が生涯のさまざまな時期において経験する多様な教育的営みや学習活動、それを通じた人の成長

や意識の変化、そして、そうした人々が創り出す文化や社会のあり方などを研究する学問といえます。対象とする範囲が非常に広く、ひと言で、社会教育・生涯学習とは何かを言い表すことができない、あるいは、人によって説明がけっこう異なる学問です。人という曖昧な存在をあつかう、とても曖昧な学問と言ってよいかと思います。

これまで私は、日本の公民館や台湾の生涯学習施設を対象に、人々の自由で楽しい学びが、住民自治の形成や民主的な社会の構築にどのようなつながっているのか研究してきました。日本のさまざまな地域や台湾でフィールド調査をし、そこで生活を営む人々の姿から、なぜ人は学ぶのか（学びたいと思ってしまうのか）、学ぶとは何なのかを考えてきました。

最近では、社会教育の視点から学校教育をとらえるべく、学校と地域の連携の歴史や実践を調べたり、日本で生まれ、東アジア諸国・地域（主に中国、台湾、韓国）でしか通じない「社会教育」という用語・概念が、東アジア圏でどのような意味をもって使われてきたのか、台湾を事例に調べたりしています。社会教育と生涯学習、日本では今でもこの2つの用語を併用していますが、日本以外の東アジア圏では生涯学習のみを使うようになっており、海外との比較から日本の特徴を明らかにしていきたいと考えています。

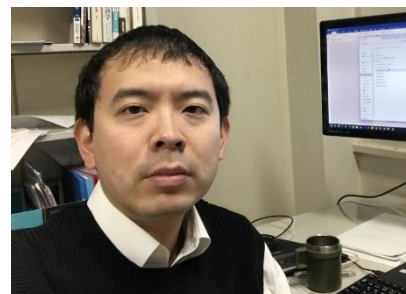
最後に、これまで関東暮らしでしたので、雪が降る地域での暮らし方をぜひ、教えていただけれ

ばありがたいです。ここ秋田でみなさんと一緒に学べることを、心から嬉しく思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

＜地域社会コース＞

熊丸博隆（くままるひろたか）助教

今年の4月から秋田大学でお世話になっている熊丸博隆です。生まれは福岡ですが、その後、静岡、東京、福岡と移り住み、高校まで福岡にいました。大学は甲子園球場のある兵庫県西宮市の関西学院大学経済学部に進学し、大学院は神戸大学大学院経済学研究科に進学するなど、関西で15年過ごした後に、秋田にやってきました。大学では主に理論経済学・計量経済学・産業組織論・環境経済学などを学び、現在はプラスチック問題を中心とした環境問題対策に関する研究に従事しています。



環境経済学は地球温暖化の原因となる温室効果ガスや廃棄物問題、昨今話題のプラスチック問題やエネルギー問題など様々な環境問題への解決策を考える、文系理系を問わない学際的な学問です。そのため、問題を解決する上で対象、手法、対策方法など多岐に渡ります。環境問題は1990年代ごろから大きな社会問題として取り上げられてきましたが、環境問題が起こる原因は何でしょうか。元々、地球には自浄作用による回復能力がありますが、人間の経済活動の中でこれを大きく超える環境汚染や自然破壊が発生した場合、地球の回復能力だけでは対処ができなくなり、環境問題として認識されます。一方で、環境保護の促進は経済活動の停滞につながるため、その国は経済発展が遅れるでしょう。したがって、経済発展と環境保護はトレードオフの関係と言えます。トレードオフとは一方を選ぶと、もう一方が選べない状況を指し、経済学の基本となる考え方です。私はこれまでの経験を活かし、経済学の理論面と実証面の2つから多種多様な環境問題を捉えることで、複雑な環境問題をよりシンプルに考え、研究を行っています。

環境問題は1990年代ごろから大きな社会問題として取り上げられてきましたが、環境問題が起こる原因は何でしょうか。元々、地球には自浄作用による回復能力がありますが、人間の経済活動の中でこれを大きく超える環境汚染や自然破壊が発生した場合、地球の回復能力だけでは対処ができなくなり、環境問題として認識されます。一方で、環境保護の促進は経済活動の停滞につながるため、その国は経済発展が遅れるでしょう。したがって、経済発展と環境保護はトレードオフの関係と言えます。トレードオフとは一方を選ぶと、もう一方が選べない状況を指し、経済学の基本となる考え方です。私はこれまでの経験を活かし、経済学の理論面と実証面の2つから多種多様な環境問題を捉えることで、複雑な環境問題をよりシンプルに考え、研究を行っています。

生家が農家だったことから、小学生の頃より田んぼで遊ぶ日々であり、秋田の広大な田園風景を見ると、懐かしく感じます。また秋田が米所ということもあり、日々非常に美味しい日本酒を頂いています。今後は秋田の経済や環境に注視しながら

ら、秋田の経済発展に寄与できればと思います。
宜しくお願い致します。

<国際文化コース>

パシュカ・ロマン (roman pasca) 准教授



今年 4 月に
着任しました
Roman Pasca と
申します。日
本では「ドラ
キュラの国」
として知られ
ているルーマ
ニアで生まれ

育ちましたが、10 年以上前から日本で暮らしています。東北が初めてなので知らないことばかりで、不安もありますが秋田での生活が楽しみです。

私の専門は日本哲学です。そもそも、日本に哲学あるの？と、たまたま聞かれますが、もちろんありますし、実は奥が深いです。私は特に江戸時代の哲学に着目し、安藤昌益、石田梅岩、二宮尊徳等の思想における「自然」と「自己」との関係を研究しています。そして最近、日本哲学だけではなく自然の哲学一般、それから環境倫理学やディープエコロジーなどといったテーマにも興味関心を持つようになり、簡単にいうと我々人間が自然というもののの中でどうあるべきか、どう生きていくべき、ということについて考えています。

今までルーマニアではブカレスト大学、日本では神田外語大学、京都大学等で仕事をしてきましたが、その中でダイバシティに富んだ様々な背景を持った学生にたくさん出会いました。そのような出会いを「一期一会」的なものとして心の中で大事にし、教師として、それから人間としての自分の成長の糧にしてきました。そしてその成長過程の中で自分自身の教育理念も少しずつ固まってきたような気がします。私にとって教師とは受動的な容器(=生徒)に知識を注ぐ者ではなく、その生徒と向き合って、ぶつかり合って、協力し合って、共同して学びの場を作り、共に学んでいく者です。つまり、実践現場で「教える」／「教わる」という二項対立の関係性を築く者ではなく、居心地のいい学びの場を学生と一緒に共構築する者だと思っています。これからもこのような「場」を一緒に作っていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

<教職高度化センター>

近江谷 正幸 (おおみやまさゆき) 特別教授

実務家教員として
教職高度化センタ
ーでお世話になって
おります。この春ま
で高校で地歴公民科
の教員をしていまし
た。



私が授業を通して
生徒たちに伝えたか
ったのは、「歴史は暗
記ではない！」とい
うことでした。多く
の人が、歴史を暗記
科目だと思っている
ように感じます。確
かに、歴史を学ぶ上
で 5W1H、つまり「
いつ」「どこで」「
誰が」「何を」「な
ぜ」「どのように」
ということは基本
ですが、地歴のテス
トで「何々したのは
誰か」「何々したのは
いつか」ばかりだと
したら、単に暗記力
テストです。暗記っ
て闇雲に意味もなく
覚えるという印象
ですが、意味も分か
らずに覚え込むのは
苦痛です。外国語の
学習で、単語を覚え
て文章を読み解くこ
とにより外国語を理
解することができる
のと同じように、歴
史にも 5W1H の先
に面白さがある、そ
の面白さを伝えたい
、というのが教員
生活の変わらない
テーマでした。

5W1H に 1R、すな
わち Result (結果)
を加え、「なぜ(原因)
そうなってどうなっ
た(結果)」に注目す
ると、因果関係が見
えてきます。そして
、その結果が次の出
来事の原因となり新
たな結果をもたらす
、歴史的事象という
のはこの繰り返しで
す。その最先端に我
々が生きていて、未
来につながっている
、このことも歴史の
面白さであり、学ぶ
意義だと思っています。

さらに、我々は先人
の成果の中で暮らし
ており、日常生活の
中に歴史の名残、残
骸が生きています。
年月日という言い方
や、甲子園球場、紅
白歌合戦、天神様な
ど、我々の日常に歴
史の痕跡がたくさん
潜んでいます。また
、「十七条憲法はなぜ
十七?」「本能寺の変
は月夜で起こった?
」「明治天皇の初仕
事は何?」など、歴
史って理屈がわか
ると結構面白い、と
いうことを伝えたく
て、高校の教壇に立
ってきました。

その思いが伝わった
かどうかはわかりま
せんが、教員を目指
す皆さんに、教職の
醍醐味をお伝えし
たいと思います。ち
なみに醍醐味ってど
んな味?

学部・研究科における研究への取り組み

秋田大学教育文化学部は、学校教育課程と地域文化学科の 1 課程・1 学科から構成されています（大学院には教育学研究科の 2 専攻があります）。県内の方々には馴染みのある名称かもしれませんが、全国の国公立大学で「教育文化」の名を冠する学部があるのは本学と山形大学だけです。その点、同じ学部内にあって、主として人間科学系と人文・社会科学系、ならびに自然科学系の学問分野が同居している、大変に希少かつ贅沢な学部だといえることがいえます。

そうした学部編成上の特質にもより、そこで行われる研究はおのずと多岐にわたっており、時に学際的なものともなっています。また、本学が秋田という地に拠って立つ大学であることの必然として、産学官の連携はもとより、地域のさまざまな「ひと」との協働により、学校教育を含め、地域社会に還元し貢献するための取り組みも、大小さ

学術研究推進会議長 大橋 純一

まざまに展開されています。ここではその詳細を取り上げるだけの紙幅に恵まれません、今後は、それらの取り組みの実際を、「みなもと」もそのひとつですが）さまざまなツールを介して発信していきたいと思っています。

近年、高等教育大学のあり方をめぐり、特に国立大学に対しては「機能別分化」が求められ、国が示した 3 つの枠組みから、本学は地域のニーズに応える大学としての役割を果たしていくことになりました。大学独自の“強み”というものがこれまで以上に強く問われる時代です。本学部・研究科においても、みずからの存在意義を今一度自覚し、地域との連携・協働を軸とした研究、そしてまた地域社会に還元し貢献するための取り組みをより一層強化していきたいと考えています。

【研究紹介】

およそ百年前のこと

英語教育コース担当 畠山 研

昨年の秋には自己紹介文を書かせていただきましたが（44 号）、今回は簡単に研究内容を紹介します。以前、専門は「英語圏の文学や文化」と書きました。文学分野ではおよそ 100 年前の小説を研究していて、その時期の小説に見られる文化に注目して読んでいます。100 年前に何があったかという、ヨーロッパでは第一次世界大戦が終わったあとで、数年に及んだ戦争を振り返る、戦後社会を見つめ直す小説が多く書かれました。長い小説もありましたが、少し短めのものや、また短篇形式のものも書かれるようになりました。それらの作品を分析するとき、これまで誰の目にも留まることがなかった細かいところに、実は決して小さくない問題が潜んでいることを見つけて発表する、大雑把に言えば、それが自分の研究になります。

無数の作品を乱読することはあまり研究に結びつきませんので、研究するうえで作家を 3 名に絞っています。イギリス文学ではヴァージニア・ウルフとキャサリン・マンスフィールド、アメリカ文学ではアーネスト・ヘミングウェイです。彼らの作品のなかでも大戦前後に書かれた小説を読み、当時の暮らしや精神の反映として何か面白いこと

が言えそうと思ったら、深読みし、論文にする前段階として、研究発表をします。発表後、フロアからコメント等いただき、それらを踏まえて原稿を推敲し、論文の形に整えます。こうして書いてみると、自分独りの力で論文を書いているのではなく、ほかの先生たち、研究者仲間たちの助言や応援のおかげで書けていると再認識します。最近の論文【“What Do You Ever Get Up for?” ―ヘミングウェイ「兵士の故郷」とウルフ『ダロウェイ夫人』】は、他大学の先生方とともに行なったワークショップ企画が元になっていて、「兵士の故郷」を読むというお題があり、それに『ダロウェイ夫人』を加えたところが自分のオリジナルです。両者には戦後少し経って街を彷徨う帰還兵がいます。ともに精神的な傷を抱え、社会復帰が困難という事情から、比較可能であり、戦後社会を知るヒントを探ることができます。とは言え、うまく書けたかどうか、本人にはよくわからないのですが、あるとき同僚の先生が「おもしろかった」と言ってくださったのを今も覚えていて、自己肯定感の低い自分にとってひそかな心の支えになっています。

【研究紹介】

自己理解・他者理解を促す国語科教育

教育実践コース担当 高橋 茉由

○国語教育の視座から国語科教育を考える

私たちが普段どのような価値観（ものの見方・考え方）で生きて、自己及び他者と関わっていくかは、これまでの経験における言葉の学習が影響しています。学習者のこれまでやこれから生きる中での言葉の学習（国語教育）を想像しながら、国語科の授業（国語科教育）を考えること。そうするには、どのように考えればよいか、ということの研究対象としています。

例えば、文学作品を扱った国語科の授業でそれぞれの学習者が様々な読みの内実や方法を表現したとします。それらの表れたものには、学習者固有のどのような経験ならびに価値観が影響しているのか。学習者が気づいていない自身の価値観や思いに気づくには、どのような学習をデザインするとよいか、などということを考えます。

以上のように考えて研究する理由は、学習者自身が気づいていない価値観や思いに気づくこと自体が深い言葉の学習であると考えているからです。私たちは言葉にすることで、現象を理解しています。その言葉にする行為自体が、自分自身の気づいていない価値観や思いに影響されています。したがって、学習者自身が気づいていない価値観や思いに気づくことは、言葉にする行為を見つめ直すことであり、その行為自体が新たな言葉の学習なのです。私たち一人一人が自分自身や他者の心の声を聴いて自己及び他者を理解していく。そのような深い言葉の学習の実現をめざしています。

○文学作品の構造と読者の文学体験

私のこれまでの研究では、主に文学作品を扱った国語科の授業から、国語教育及び国語科教育の在り方を探究してきました。そこで軸となる考えは、文学体験論です。

文学体験論とは、読者が文学作品を読む際に、作品世界をどのように体験しているのかについて追究した考えをさしています。その中でも私が扱っている文学体験論は、次のようなものです。作品世界は入子型重層構造であり、そこに役割をもった虚構の人物が配置されていると仮定します。読者は文学作品を読み進めていく中で、虚構の人

物になりながら、イメージを重ねて対話（他者とだけでなく、自己内での他者や自己との対話も含めた行為）を繰り返します。

特に、上記の「虚構の人物になる」という考えが重要です。「なる」というと、主体をなくすというように考えることもあります。ここで言う「なる」は、完全になることはできないということをお前提として「他者になる」と言っており、主体を大切に考えたからです。私たちは、自身の経験、経験から抱く思いや考え等といった背景がそれぞれちがいます。したがって、他者を完全に理解することもできませんし、なることもできません。では、どのように他者になるのか。自己のこれまでの背景と関連付けて、他者の思いや感情、背景を想像し他者を理解していることが、私のこれまでの研究からわかってきました。

つまり、他者になるとは、自己と関連付けて他者を理解することであり、他者を理解することは自己を理解することでもあるのです。

○文学体験論を活かした国語科の授業

上記の文学体験論を活かして国語科の授業を行うことで、深い言葉の学習の実現に近づきます。

詳しい実践方法は、学習者や実践者によって幾数にもありますが、根底にあるのは、学習者一人一人の存在を尊重し、互いの背景を理解し合える学習の場をどのように創出するか、という考えです。授業における言語活動をどうするか、その際の教師の手立ては何が必要かについて考えることはもちろん必要ですが、学級（学習する場）の文化をどのように醸成するかといった大きな枠組みについて考える必要もあると考えています。

今後も研究を進めていき、微力ながらも現場の学習者や教師の深い言葉の学習の創出に貢献できればと思っています。

【研究紹介】

環境移行と学校適応

心理実践コース担当 ホウ・ユエジャン

私の専門領域は発達心理学です。特に、これまででは思春期への発達と社会環境の変化が重なる小学校から中学校に移行する過程に注目してきました。この時期は不登校率の増加、いわゆる「中1ギャップ」という学校適応の問題が指摘されるなど、多くの研究者や実践者に注目されています。

しかし、環境移行によって学校不適応の問題に至る心理学的メカニズムについてはまだまだ不明確な点が多くあります。例えば、一般的には、まさに「移行」が不適応に至る原因であると言われてながら、実際にはむしろ移行直後で適応状態が向上することが報告されています（“ハネムーン期”と呼ばれることもあります。面白いネーミングです）。こうしたことから、環境移行直後の即時的な適応過程と、移行後の長期累積的な適応過程に分けて、その実態やメカニズムを正確に明らかにしていく必要があります。この問題はまだ分かっていないことが多いですが、私は複雑な学校適応の実態とその原因をよく反映する統計学的モデルを構築することによって、現象を理解していくことを目指しています。

また、もし本当に「移行」が不適応に至る原因であるなら、「移行の程度」が比較的小さい義務教育学校などの小中一貫校では、通常の学校よりも、不適応になりにくかったり（適応状態の平均値の変化が緩やかだったり）、適応状態を規定する原因変数の状態が異なっていたりすると予想されます。実際このような予想のもと、行政は小中一貫教育の実現を進めています。しかし、計量的に分析してみると、小中一貫校と通常の非一貫校の間に、適応状態の変化量や規定要因に関する系統的な差異は認められませんでした（侯・太田・加藤，2021，教育心理学研究）。「学校」はほとんど誰もが経験したことのある環境ではありますが、このように計量的に研究してみると、自分の予想や社会の認識が当たっていないケースは多々あります。

最近では、なぜ環境移行が適応状態を変化させるのかという問題に対し、ヒトの脳の情報処理メカニズムに注目した生理心理学的な研究を進めています。具体的には、ヒトは不確実性の高い環境に置かれると、社会的排斥（social exclusion）

を示唆するシグナルに対して、自動的により多くの注意が向けられることで、排斥の検知感度が（ときにはむしろ不適応なほどに）高くなるのではないかと仮説を立てています。こうした研究では、学校を対象とした研究よりも厳密な条件制御による実験が必要です。今後は学校現場での研究と並行して、実験室での行動実験や事象関連電位（脳波の一種）の手法を用いた基礎研究も進めていく予定です。



【研究紹介】

博士論文とその後の研究

地域社会コース担当 ワン ユンユン

わたしはアメリカ合衆国のフロリダ国際大学、経済学大学院において、博士号（PhD）を取得しました。博士課程では、現在のアメリカの製薬会社およびそれを取り巻く医療制度、法律、環境などを対象とした研究をし、ブランド薬品の発明とそれがジェネリック薬品の開発、普及に及ぼす影響に関する博士論文を提出しました。

最近では国際貿易政策や国際開発政策にも研究対象を広めています。例えば、多国籍企業は、海外に生産を移転するとき先進国には最新の技術を導入するが、発展途上国には、古い技術を移転する傾向があることに注目しました。これはもちろん発展途上国では先端技術を扱う人材不足ということも有りますが、私は、発展途上国において多国籍企業の知的財産が保護されていない事実に着目し、多国籍企業は、発展途上国内企業との競争が激しいが、多国籍企業間同士の競争がゆるやかな時には、先端技術移転をひかえるということを発見しました。

一方、今日アメリカで不法移民の増加が問題になっていますが、特にいわゆるサンクチュアリ＝シティーと言われる行政区が多く（約300）存在し、そこでは、不法移民を保護していて、たとえ犯罪者でも連邦政府の移民法に反して、強制送還を

拒否しています。そこで、わたしは、不法移民保護と不法移民数、犯罪数、失業者との関係を研究し、不法移民保護は失業率を増加するが不法移民数も犯罪数も必ずしも増加しないということを示しました。

今の研究対象の一つは、国家間の廃棄物リサイクル問題です。中国は長年先進国から工業廃棄物を輸入しリサイクルしてきましたし最近ではインドもリサイクル大国として台頭してきました。輸出国との対立もあり、去年はフィリッピンがカナダからの廃棄物輸入を拒否したことがニュースで話題になりましたし、今年は突如中国政府が全ての廃棄物の輸入を禁止したことも話題になりました。この分野の研究はあまり行われておらず、私は廃棄物リサイクル貿易政策の環境への影響を研究しています。

秋田大学では経済学入門や国際経済学入門などを簡単な英語を使って教えています。経済のことを学びたい人はもちろん、英語の上達を目指す人もぜひ講義を受けてみてはいかがでしょうか。



【研究紹介】

安藤昌益の研究

国際文化コース担当 パシュカ・ロマン

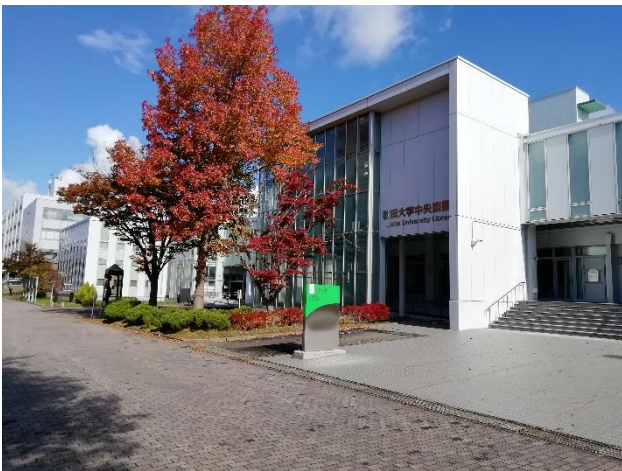
私の専攻は日本哲学で、特に江戸時代における「自然」という概念の形成について研究しています。ここ数年、秋田藩生まれの安藤昌益の思想にフォーカスしてきました。

なぜ、ルーマニア人の私が安藤昌益の研究をしているのでしょうか。その理由は実は、文学です。

高校4年生の時にルーマニア語に翻訳された、とある日本文学の作品に偶然に出会いました。その作品を読んでみたら、「あ！これは面白い！これは日本語で読めるようになりたい！」と思ったのがきっかけになり、日本語の勉強をはじめようと決心しました。その作品は、井上靖の『猟銃』という短編小説でした。物語の描き方や文体の美しさに惹かれ、日本文学への第一歩を踏み込むことになりました。その後、ルーマニアの首都にあるブカレスト大学に入学し日本語・英語のダブル専攻に入学しました。大学2年生の時、日本の古典文学に興味を持ち始め、卒業論文は『源氏物語』における女主人公について書きました。学部を卒業してそのまま大学院に進学しました。

安藤昌益という人物とどのように出会ったかと言いますと、実はそのきっかけも文学でした。Philippe Forest というフランス人の作家が小林

一茶の一句にインスパイヤされ、「Sarinagara」というタイトルの小説を出しています。そして、その小説の一節を説明するための作者注に、農本主義 (physiocratie) についての記述がありました。農本主義とは何かと調べてみたら、その特徴としては「富の唯一の源泉は農業である」という考え方があり、農本主義のフランス人の思想家は自由放任 (laissez-faire) の立場を主張し、結局その思想がイギリスにも渡り、アダム・スミスにも大きな影響を与えたということでした。農本主義の論文を読んでいたら、その中に安藤昌益も農本主義の思想家ではないかという説が紹介されていました。その時に初めて、「安藤昌益」という名前を知りました。そこから昌益の研究を始め、それが徐々に面白くなっていき、博士論文で安藤昌益とアダム・スミスの比較をすることにしました。論文で安藤昌益とアダム・スミスの思想における「自然」という概念、特に「人間」と「自然」との関係はどう描かれているのかということに着目しました。



【研究紹介】

秋田藩主佐竹義和の顕彰と実像

国際文化コース担当 清水 翔太郎

日本史研究の根幹となるのは、歴史資料、すなわち史料の分析です。私は日本近世史を専門とし、近世大名家文書を用いて、大名家の婚姻や妻妾制の研究を中心に進めてきましたが、ここでは、5年くらい前から取り組んでいる秋田藩主佐竹義和の研究について述べたいと思います。

秋田藩主というと、具体的に名前とその事蹟が思い浮かぶ人物はいるでしょうか。初代藩主佐竹義宣は久保田城と城下町を建設し、現在の秋田市の基礎を築いたといえます。8代藩主佐竹義敦（曙山）は18世紀後半に秋田蘭画という西洋技法を取り入れた絵を描いたことで知られています。義敦の子で9代藩主の義和は藩政改革を主導した「明君」として、高校日本史の教科書に登場することもあります。これら3人の藩主は比較的知られていますが、歴代藩主で銅像が製作されたのは、最後の藩主（12代）佐竹義堯のみです。千秋公園に義堯像があるのは、義堯が戊辰戦争時に奥羽越列藩同盟から離脱する判断をした藩主とされ、その死後、明治後半から旧藩士らにより勤王の象徴として顕彰されたためです。

実は9代藩主佐竹義和が「明君」として全国的に知られるようになったのも近代になってからです。旧藩士で秋田市長を務めた大久保鉄作は、藩政改革を主導した秋田藩主が知られていないことを憂え、『天樹院佐竹義和公』（1916年）を執筆し、伊藤博文に義和を紹介しました。その後、旧藩

士らによる天樹院公頌徳集編纂会が『佐竹義和公頌徳集』（1921年）を刊行し、義和明君像が共有されることとなったのです。義和を知る上では、近代において誰がどのようにして義和像を創造して、それを広めたのかを明らかにしなければなりません。

それでは、義和の実像はどのようなものだったのでしょうか。この点を明らかにしたいと考えて、私は義和の自筆政務記録「用向書留」（全17冊、秋田県公文書館所蔵）を読み進めています。本史料は義和の自筆記録であると認識されておらず、旧藩士が伝記を編纂した際にも用いられた形跡はありません。しかしながら、義和が関与する藩政の機密事項が脚色なく記されている貴重な史料です。秋田藩では多くの藩士が日記を作成していたことが知られていますが、実は藩主に至るまで政務記録を作成し、保存・管理していたのです。義和は江戸での公務記録も作成しており、自らの言動に関する記録の作成・管理を熱心に行っていました。こうした記録の分析を進め、義和の実像に迫った評伝をいつか刊行できればと考えています。



【研究紹介】

企業発表業績予想から読み取る経営者の自信過剰

地域社会コース担当 石黒 武秀

皆様は企業が発表する業績予想（経営者予想）と聞くとどのような情報だと想像しますか。単純に考えれば企業が将来どのくらいの業績になるかを表しています。しかし、昨今のウクライナ情勢や COVID-19 のように企業の将来が見通しにくい状況や、企業や経営者のみが持っている独自情報（いわゆるプライベート情報）などの様々な理由から、経営者予想の数値は実際の業績と乖離します。私の研究では企業の公開情報の特徴や分析方法を示すことで、企業の情報公開に関する制度の根拠を示すことや、情報利用者が持つ情報への制約を減らすことで社会に貢献することができると考えています。

私は、経営者のプライベート情報へのバイアスとして経営者の「自信過剰」を経営者予想から読み取りました。自信過剰は、プライベート情報を過信し、将来の結果に楽観的な状態のことです。経営者が自信過剰になると、投資の結果への見通しが良くなるので積極的な投資行動を行うことが

予想されることから、企業は成長機会をつかむことができる反面、あまりにも積極的すぎる行動から効率的な投資水準よりも過剰に投資を行うことで企業の価値を毀損するかもしれません。企業の情報利用者にとって、経営者が自信過剰であるということを知ることができると、経営行動の方針を予測することができると考えられます。

先行研究において、経営者の自信過剰は経営者予想を実際の業績よりも乖離した数値にすることが示されています。しかし、上記の通り経営者予想は経営者の自信過剰以外の様々な要因によって変化するものであり、先行研究で示された経営者予想の特徴があればその企業の経営者が自信過剰であると判断するのは早計です。私の研究では先行研究を発展させて、経営者予想から経営者の自信過剰に関する情報を抽出する方法を提案しました。その方法は以下の(1)式の通りです。

$$\begin{aligned} & \text{ManagementForecast}_{i,t} \\ &= \sum_k \alpha_{1,k} \text{CEOD}_{k,i,t} + \sum_l \alpha_{2,l} \text{Control}_{l,i,t} + \sum_m \alpha_{3,m} \text{YEARD}_{m,i,t} + \sum_n \alpha_{4,n} \text{INDD}_{n,i,t} \\ & \quad + \varepsilon \\ & \text{ManagementForecast}_{i,t} \in \{ \text{FERR}_{i,t}, \text{FBIAS}_{i,t} \}. \end{aligned} \tag{1}$$

(1)式の ManagementForecast は、経営者予想と実際の業績の差を表しています。CEOD は CEO などの社長級人物を識別するダミー変数（経営者固定効果）です。CEOD 以外の変数が経営者予想と実際の利益の差が大きくなったり小さくったりする要因を表しているため、先ほど紹介した先行研究の議論が正しければ、CEOD の係数の推定値は経営者の自信過剰をはじめとする経営者自身の要因で経営者予想と実際の利益の差が広がっていることを説明しています。この自信過剰の推定方法の応用例については、私の研究において、投資、資金調達、会計選択に影響することが示されています

（詳しくは秋田大学の教員紹介ページに示されている研究業績を参照してください）。

以上のように、私のこれまでの研究では経営者予想から経営者の自信過剰をとらえることはある程度可能ということを示してきました。将来の研究において、企業の行動に影響する経営者ごとの要因がどれだけ経営者予想に反映されているかを分析することで、経営者予想から得られる情報がいかに豊富であるかを知ることができ、経営者予想の開示の根拠や経営者予想の情報価値を高めることに貢献すると考えられます。

【研究紹介】

経済学から見たプラスチック問題

地域社会コース担当 熊丸 博隆

私はこれまで環境経済学における廃棄物問題を中心に研究を行い、近年ではプラスチック資源循環に関する経済学的分析を行ってきました。近年マイクロプラスチックに伴う海洋汚染問題解決のため、日本ではレジ袋有料化やプラスチック資源循環促進法が制定され、プラスチック削減が進んでいます。ここでは私が行ったプラスチックに関連する研究を2つ紹介します。

1つ目は中国の輸入禁止措置が廃プラスチック市場に与える影響に関する分析です。中国は2000年以降、大量の廃プラスチックを輸入していましたが、2017年12月に、廃プラスチック、古紙、その他のスクラップ製品の輸入を禁止しました。私は廃プラ市場の余剰分析を用いて、中国の輸入禁止措置が日中の廃棄物取引に与える影響の分析を行いました（図1のA）。得られた結果はこの輸入禁止措置が日本と中国双方の廃プラ市場にマイナスの影響を及ぼしていることが明らかになりました。特に、輸入国である中国のマイナスの規模は日本よりも非常に大きかったことから、中国は輸入による貿易利益を大きく減らしてでも廃プラスチックの輸入を禁止したことがわかりました。

2つ目は日本の容器包装リサイクル法（容リ法）がプラスチック製品の原材料の使用量にどのような影響を与えたかを検証しました。容リ法は、容

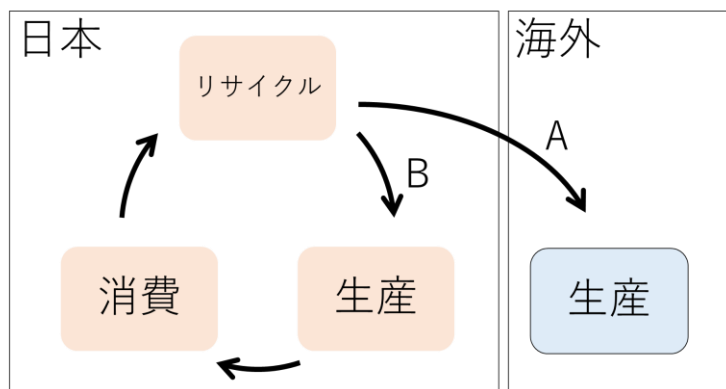


図1 プラスチック資源循環

器包装が多く占める廃棄物の削減を行い、資源としてのリサイクルを促進することを目的として1997年に施行されました。この効果を推定するために差分の差分法を用いて、容リ法の施行がプラスチック製造における再生プラの使用に与えた影響の分析を行いました（図1のB）。得られた結果は容リ法施行後、プラスチック製品に使用される再生プラ使用量および使用率ともに増加していることが明らかになりました。ただし、使用率の増加幅が1%程度にとどまったため、日本は国内の再生プラスチック使用を促すために、再生プラの使用率を基準とした、プラスチック製造に対する政策立案が期待されます。

また現在は秋田の環境問題にも注目しています。例えば令和2年度の秋田市の1人1日当たりの家庭系ごみ排出量は518グラムであり、全国平均とほぼ同じ量です。しかしながら、秋田県全体で見た場合はこれが578グラムであり、この差を生み出す要因分析および削減に向けた政策立案を今後検討しています。さらに秋田県にある洋上風力発電が日本や秋田の経済に与える影響も今後段階的に研究を行う予定です。



写真1 プラスチック海洋汚染問題

「新型コロナウイルス感染症による企業活動への影響調査」について

代表：益満 環（地域社会・心理実践講座）
臼木智昭（地域社会・心理実践講座）
荒井壮一（地域社会・心理実践講座）

秋田県中小企業家同友会（代表理事：児玉修氏）の協力の下、県内会員企業 380 社に対し郵送によるアンケート調査を実施し、新型コロナウイルス感染症による企業活動への影響について調査した。本アンケートの有効回答数は全 380 社中 219 社（回収率 57.6%）であった。アンケートの結果、例えば、新型コロナウイルスの影響がすでに出ている企業が 64.4%（141 社）に及び、その内訳として売上・受注の減少が最も多く 8 割強に及んだ。また、新型コロナウイルス感染症に対して、国・県・市町村の支援制度を活用した企業が全体の 7 割強に及び、コロナ禍で窮した企業の資

金繰りを政府系、民間金融機関の融資が支えている状況が浮き彫りとなった。その他、回答企業が属する職種の詳細な状況や国・県等に必要とされる施策に対する意見等、有用な回答を得ることが出来た。今後は、本プロジェクトの研究成果を県内中小企業に還元するとともに、コロナ禍における新たなビジネスモデルの創出に向けて研究を進める予定である。

調査結果は『あきた経済』秋田銀行経済研究所月報 2021 年 6 月、4-11 ページに掲載。

秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第 44 号

2022 年 3 月、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第 44 号が発行されました。ぜひご覧下さい。

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

【原著】

地域における継承的アーカイブと学習材としての活用(4)ー昭和館を事例としてー・・・外池 智
書くことに関する「言葉による見方・考え方」とその指導法としての「文種換え」の研究(3)

・・・成田雅樹

モーションキャプチャ舞踊学習支援装置を用いた秋田の盆踊りの自主的学習ー学習者のメタ認知と学習方略の事例的検討を通してー

・・・松本奈緒

「コロナ禍での乾燥した煮干しをそのまま用いた中学校での解剖授業の実践報告」・・・石井照久

秋田県教職キャリア指標を活用した校内研修の在り方の一考察・・・正木 節・佐藤修司

特別支援学校における自閉症の主体性を育む授業づくりの検討

・・・小野直子・高田屋陽子・櫻田佳枝・武田 篤
知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善ー共通実践事項の設定とそ

の実践状況の評価を通してー

・・・池田和馬・諸岡美佳・藤井慶博

重複障害教育課程における教科別指導の実践例ー

2ー肢体不自由特別支援学校授業研究会の指導

助言を通してー・・・谷村佳則

子どもの行動を周囲との関係や影響の中から捉える事例検討の在り方に関する研究

・・・今野菜穂子・鈴木 徹

文種の特徴を意識して書く力を高める文種換え作文の指導・・・菅野宣衛

【萌芽研究】

試論：ICT 活用による子どもの学びの展開と実践に対する教師のスタンス・・・細川和仁

大学生による遠隔コミュニケーションでの協働作業において言語表現の形態が二者間の会話行動に及ぼす促進効果・・・伊沢 慧・中野良樹

特別支援教育に携わる教員の認識する知的障害者のテレワークに向けた支援内容

・・・前原和明・山口明日香・鈴木 徹・今井 彩

【資料】

松江市における就労アセスメントの充実に向けた一考察：相談支援専門員へのアンケート調査をもとに・・・青山貴彦・前原和明

秋田大学教育文化学部研究紀要人文科学・社会科学第 77 集

2022 年 3 月、秋田大学教育文化学部紀要第 77 集が発行されました。ぜひご覧下さい。

【人文科学・社会科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

声の文化／文字の文化と視聴覚連祷－ジョナサン・スターンの「視聴覚連祷」批判の再検討－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・和泉 浩

新型コロナウイルス感染症の秋田県観光に与える経済的影響・・・・・・・・・・臼木智昭・伊藤慎一

第一次世界大戦期における J. M. Barrie の演劇－Echoes of the War (1918) の作品を中心に－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・大西洋一

北奥方言の変化段階に見られる狭母音音節の諸相－高年話者の複数発音をもとに－
・・・・・・・・・・大橋純一

道の駅ガイドブックによる秋田県の地域性に関する分析・・・・・・・・・・高橋環太郎

アニエス・ヴァルダとその晩年の映画制作法－『百一夜』から『落穂拾い』へ・・・・・・・・辻野稔哉

政治的アレゴリーとしての映画－『スパルタカス』に賭けられたもの－
・・・・・・・・・・中尾信一

彼の脳裡にほのかにかつ心地よい音をたてて漂うもの～マックス・ブローの小説『ユダヤ人の女たち』(1911) における「ニュアンス」について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・中村 寿

映画における「懐疑論者」の役割－セレブレンニコフ『LETO - レト -』について－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・長谷川 章

Syntactic Nominalization and Nominative-Genitive Conversion: An Incremental Categorical Labeling Analysis
・・・・・・・・・・・・・・・・・・HOSHI, Hiroto

Zoom を活用したオンラインフィールドワークの長所と短所・・・・・・・・・・益満 環

信教の自由の日独比較憲法史的考察－信教の自由の制約に関する議論を中心に・・・・・・・・棟久 敬

【教育科学】

[秋田大学学術情報リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://nii.ac.jp)

美術科教員養成におけるデザイン教育に関する考察(2)－主として「情報表現」の「プロセス」の観点から－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・石井宏一

秋田県大仙市における 500 歳野球大会に関する調査への参加を通じた学生の学び・・・・・・・・伊藤恵造

特別支援学校における生徒のキャリア発達を促す現場実習のフィードバック方法
・・・・・・・・・・・・・・・・・・今井 彩・前原和明

ICT を用いて自分の動きを確認する中学校マット運動の学習における学習者の認知研究－ふきだし法による分析を通して－
・・・・・・・・・・大関隆貴・加賀谷武英・栗林 守・松本奈緒

「見ること・考えること・表現すること」を通じた対話による美術鑑賞の一考察
・・・・・・・・・・・・・・・・・・鎌田 悟・田仲誠祐

「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界文化遺産登録までの変遷と教育資産としての可能性
・・・・・・・・・・・・・・・・・・近江谷正幸・鎌田 信

教職員一人一人の学校参画意識を高めるマネジメントー学校の教育力の向上に向けた校内研修の在り方ー・・・・・・・・・・伊藤充敏・佐藤修司

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ(9)ー広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」を事例として－
・・・・・・・・・・・・・・・・・・外池 智

病気療養児への ICT を活用した同時双方向型授業配信の成果と課題に関する検討ー中学校における実践に関わった教員の語りを通してー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤井慶博・佐藤忠浩・千葉雅樹

「インプロ」の応用可能性に関する考察ーヴァイオラ・スポーリンのシアターゲームの視座からー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・保坂和貴

家庭科における体験的学習を取り入れた授業の検討ーたまご赤ちゃんを活用した保育学習ー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・堀江さおり

An Intake Assessment Tool for Vocational Rehabilitation: Development of a Japanese Version of Intake Assessment and Outcome Evaluation (IAOE)
・・・・・・・・・・・・・・・・・・MAEBARA, Kazuaki; YAEDA, Jun

中学校柔道の実施と指導者の問題意識ー中学校保健体育教諭のアンケート調査からー
・・・・・・・・・・・・・・・・・・野村武弘・三戸範之・松本奈緒

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

2022年度日本学術振興会科学研究費の新規採択状況

本年度は20件が採択されました。昨年度の9件から大きく伸びました。

期間	研究種目	氏名	職名	研究課題名	直接経費合計
R4-R7	基盤研究(B)	Horton W. Bradley	准教授	インドネシアのマラリア戦争—防疫・医療体制から見える日本占領期の社会	13,300
R4-R6	基盤研究(C)	佐々木重雄	准教授	数理ソフトウェアを活用した中等教育教材集の開発とその配布基盤の研究	1,800
R4-R7	基盤研究(C)	山崎義光	准教授	20世紀ルポルタージュ隆盛期における小説による現実性の表象手法についての研究	1,700
R4-R6	基盤研究(C)	外池 智	教授	地域における継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の構築	3,000
R4-R8	基盤研究(C)	松本奈緒	准教授	構成主義からの体育の学習内容の検証—学習者の描画分析を中心として	3,300
R4-R6	基盤研究(C)	高村竜平	准教授	デジタルデータを活用した20世紀初頭の韓国・済州島における村落と土地利用制度の解明	1,200
R4-R7	基盤研究(C)	若有保彦	准教授	地方の小規模校における教科指導ミドルリーダー養成モデルの構築	1,400
R4-R6	基盤研究(C)	伊藤恵造	准教授	超高齢社会における総合型地域スポーツクラブの活動継続のあり方に関する実証的研究	700
R4-R6	基盤研究(C)	清野秀岳	准教授	不活性小分子の資源化を志向した多中心活性化—多電子移動クラスター反応場の開発	3,200
R4-R6	基盤研究(C)	成田雅樹	教授	小学校国語科「書くこと」の資質・能力を育てる教科等横断的な学習に関する研究	900
R4-R6	基盤研究(C)	綾部直子	講師	学齢期の睡眠・覚醒相後退障害の治療改善に寄与する心理社会支援の可能性	3,200
R4-R6	基盤研究(C)	池本 敦	教授	伝統的食用油脂の機能性の解析と食生活への活用に関する研究	3,200
R4-R6	基盤研究(C)	志立正知	教授	『源平盛衰記』の注釈学的新研究	2,400
R4-R7	基盤研究(C)	羽田朝子	准教授	日本占領地の中国人作家の自伝文学にみるナショナル・アイデンティティ	2,300
R4-R6	基盤研究(C)	佐藤 学	教授	算数・数学における自律的発展型授業を促すゼミナール型教育プログラムの開発	3,200
R4-R7	基盤研究(C)	武田 篤	教授	ASD傾向を示す場面緘黙児に対する社会生活への適応を目指した支援方略の構築	3,000
R4-R7	基盤研究(C)	藤井慶博	教授	当事者のエンパワメントに立脚した病気療養児の復学支援システム構築に関する研究	1,700
R4-R7	基盤研究(C)	佐藤修司	教授	大震災後の災害・危機対応及び復興に向けた学校と地域の連携構築に関する研究	3,100
R4-R7	若手研究	前原和明	准教授	障害福祉サービスに携わる就労支援者のための職業的アセスメント研修プログラムの開発	3,000
R4	奨励研究	山下清次	技術専門職員	3Dプリンタで製作した教材を用いた防災教育プログラムの開発	300

学部・研究科の活動（2022 年 4 月～10 月）

【全学】

4/4：在学生ガイダンス
4/5：入学式
4/6：新入生ガイダンス
7/30：オープンキャンパス
10/15・16 秋田大学祭
10/25：総合防災訓練
10/28：秋田大学高大接続教育フォーラム「高大接続の新展開：情報教育への新たな取り組み」

【学部】

6/24：対面による教育研究・運営カウンスル
7/25-8/19：社会教育主事講習（主催：秋田県生涯学習センター）
9/16-18：日本教師教育学会第 32 回秋田大会（全面オンライン）－本学部共催、秋田県教委・秋田市教委後援
9/27：第 1 回 F D 「本学部の留年生等の状況と学生サポートについて」
9/29：第 1 回地域連携セミナー

【教育学研究科】

5/19：教職実践専攻説明会
7/1：第 1 回研究科説明会
8/30：教職実践専攻－ I C T スキル向上のための F D ・ S D
9/23：第 1 回スクールリーダー研修会
9/24：大学院第 1 期入試
10/21：第 2 回研究科説明会

【附属学校園】

4/7：附属中学校入学式
4/8：附属小学校入学式
4/15：附属特別支援学校入学式
6/3：附属中学校公開研究協議会
6/10：附属小学校公開研究協議会
6/23：附属幼稚園公開研究協議会
8/4：附属特別支援学校生徒が竿灯まつりに参加
9/10：附属特別支援学校創立 50 周年記念式典・祝賀会
9/30：附属小学校第 1 回オープン研修会



発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町 1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科 H P <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなと」バックナンバー⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html

教職大学院通信「暁鐘の音（かねのね）」⇒http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html

* 誌名「みなと」の由来である秋田県女子師範学校校歌（1910 年制作）を聴くことができます。

http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html をご覧下さい。